

16 生田教授会因交要求総決起集会

我々の奮闘^{の斗}が切り開いた地平とは、1969.10 お酒田斗争、佐保、王子、全日学闘争によつて切り開かれた真そのものを、何れ明治大学における内在的矛盾を越え得ることにより、これには自己^{主体}の根にとらえかえることにより(自己の内なるカギード、自己否定の論理)我々の斗争は、
予かりにかつ暴力的に自己表現して来た。この運動、斗争を支えるものは

我々は、1960年安保斗争に於いて 6.15座通用門を圧倒的有明大生のエネルギーにより突破したところ、如実にあらわな農学生会の血ぬらされた根、そしてそれ以降の憲法斗争、日衛斗争、インフラ斗争、
我々の政治斗争、さらに学内の諸々の斗争を果敢に闘って来たことを知っている。

この過程から生じて来た向野の実体の蓄積が、とりわけ日大、東大……の全日学闘争という情況の
奪つまりのほかから何れ明治大学においても内在化し、具現化せざるを得なかった。学内諸問題について
具体的に、37年農再編斗争、学闘斗争、学レ斗争……卒斗争、といった何れ改良・要求斗争を組み
こねらを自求したのである。この過程から我々は、「制度」といって壁にぶつかったのである。この壁を
破らなければと、体ごとがっつけているうちに、その壁を乗り越えて我々の前に登場したのが、権力である。
そう我々を教育している教授の集団、教授会なるものは、時として、学校当局の犬兵となり、平時として、
文部省(国家権力)の走狗として一切の我々の斗争を圧殺して来たのである。制度を変えれば
よくなるか、否、そんなもの細々ならぬニアと厚いニアくらいに差にしかなり得ないのである。我々
は手先だけの手直しを一切拒否する。亦一日千秋のごとく、これを駄目ならぬ水ぎ式の、アラダマチ
ツツ有学生対策^のことをやっている教授会を解体する。教育とは、大学とは、学問とは、我々はいく
つもの問を投げつて自己にとらえかえした。そして今も、自己と自己の意志と緊張のなかで、語るに重
い物を背負い、尸史の時間の荒れにさからい、不条理なる時間を荒れとして一切の日常的行為を。

我々の斗争、それは何れ改良斗争から、大学共同体の批判へさらに国家(幻想共同体)への闘いへと
と突き進んだ。(争突例として、農再編斗争白の参加の論理の破綻、11.9株動隊導入……)では、今日
われに何を課題に設定すべきか。我々は、生田教授会因交を要求し、さらには19日から行なわれる一部の
試験をとりわけ本日行われる2部試験を、我々の圧倒的エネルギーを持って粉砕し、この闘いの潮流
を、碌泉公園へと流動すべきである。

本日 5時 全学評運動について 討論会 助共開

場所: 雑誌会館

2部試験粉砕斗争(4部)

明大生田全共闘